

## 巻頭言

ぶんすいれい  
分水嶺 — DXが農業・農村にもたらすもの —

みらい建設工業株式会社

代表取締役会長

小西 武



信州にある日本海と太平洋に注ぐ分水嶺の一つである塩尻峠（別称・塩嶺峠、標高一〇一二m）の近郊で生まれた。祖父が塩尻の駅長時代に購入した山林を、戦後、父が開墾し、ぶどうを主体に果樹を栽培していた。その父が亡くなり、ぶどう棚の下の草刈りや耕耘も自力では困難になった。畑は改良山成畑なので、ぶどう棚を撤去すると大型トラクターが入れるようになる。今では、耕耘やそば作りを近隣の農家をお願いしている。

いまさらであるが、大型機械の力は大きい。機械化が進むと経営面積は拡大できる。農地バンクを活用した担い手への農地集積率は、現在でも、年々上昇はしているが、政府が掲げる八割の目標（二〇二三年）とはかけ離れている。危機感を覚えるのは私だけではないだろう。

一方、農村に目を向けると、ここ数年、農業・農村への関心が高まり、半農半Xといった働き方の選択や二地域居住なども増えてきている。最近では、新型コロナウイルスの影響で、テレワークなど場所を問わない働き方が進展し、集計開始以降初めて、東京都での転出超過となり大きな話題になった。このトレンドに加えて、昨年、発足して岸田内閣が掲げる「デジタル田園都市国家構想」は農村回帰とスマート農業を後押ししている。

さて、DXにより、東京にいながら自動走行農機を操り、ICTを用いて水や肥料管理等を行うなどのスマート農業も夢ではなくなった。圃場周辺部におけるパイプライン化、自動制御技術を活用した水管理システム、肥料や気象などの農業データ連携基盤などが

整備されると誰もが参入しやすい産業になる。

さらに、スマート農業の推進だけではなく、農産物の輸出など生産・流通・消費のバリエーション・チェーンを再構築しDXを活用すれば、農業は成長産業に変わっていくだろう。

さらに、農業の持続的な発展と農村の振興を支えるため、二〇二〇年十二月に閣議決定された「防災・減災、国土強靱化のための五カ年加速化対策」に基づき、農業水利施設の戦略的な保全管理、ため池の整備、流域治水などの農村の強靱化も推進している。

これからの農業・農村に不可欠な「さらに」をいくつか書き出してみた。「さらに」は枚挙にいとまがない。これらの「さらに」を同時に実現することが肝要である。それは、人の健康を守るためには、必要栄養素をまんべんなくバランスよく摂ることが大切であるという「栄養素の桶理論」と同じである。つまり、不足している栄養素があれば、十分に摂取した栄養素までもが、不足栄養素に対応した量だけしか利用されず、それ以外は排出されてしまう。

我々も日本も、どんな未来にたどり着くか、その分水嶺に立っていると考えている。地方の課題を解決するためのスマート農業、バリエーション・チェーンの再構築、国土強靱化及びデジタル実装を全体のバランスを取りつつ、スピード感を持って実現されなければならない。そして、その有効な具体策は日本各地で展開している国営土地改良事業が、未来の日本のモデルとなる魅力的で活気ある田園空間を創造し、それを横展開することだ。会員企業各社がその一翼を担っていることを肝に銘じたい。